

物に属けて思ひを發す歌一首 并せて短歌

三六二七番

朝されば 妹が手にまく 鏡なす 三津の浜辺に 大舟に ま梶しじ
貫き 韓国に 渡り行かむと 直向かふ 敏馬をさして 潮待ちて
水脈引き行けば 沖辺には 白波高み 浦廻より 漕ぎて渡れば 我
妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬ さ夜ふけて 行くへを
知らに 我が心 明石の浦に 舟泊めて 浮き寝をしつつ わたつみ
の 沖辺を見れば いざりする 海人の娘子は 小舟乗り つららに
浮けり 暁の 潮満ち来れば 葦辺には 鶴鳴き渡る 朝なぎに
舟出をせむと 舟人も 水手も声呼び にほ鳥の なづさひ行けば
家島は 雲居に見えぬ 我が思へる 心和ぐやと はやく来て 見
むと思ひて 大舟を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ よそ
のみに 見つつ過ぎ行き 玉の浦に 舟を留めて 浜辺より 浦磯を
見つつ 泣く子なす 音のみし泣かゆ 海神の 手巻の玉を 家づと
に 妹に遣らむと 拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る 使ひなけれ
ば 持てれども 験をなみと また置きつるかも

反歌二首

三六二八番

玉の浦の 奥つ白玉 拾へれど またそ置きつる 見る人をなみ

三六二九番

秋さらば 我が舟泊てむ 忘れ貝 寄せ来て置けれ 沖つ白波